福島県方言研究センター活動報告書

所　長　半沢　康

○研究目的

本センターの目的は以下の 2 点である。

(1)福島県浜通りおよび北部阿武隈高地の方言談話資料の収集

(2)被災地方言の保存・継承活動に長期的に取り組むための研究者ネットワークの構築

周知の通り，福島県太平洋沿岸の浜通り地方は東日本大震災において広く津波の被害を受けるとともに，東京電力の原子力発電所事故により，多くの自治体の住民が避難生活を強いられた。事故の被害は沿岸部にとどまらず，飯舘村，川俣町山木屋地区，葛尾村，田村市都路町，川内村といった阿武隈高地北部の各地へも及んでいる。

福島大学では 2012 年から 16 年にかけて文化庁の委託を受け，被災地域各地の方言談話資料収集調査に取り組んできた。当初は県内他地域に設置された仮設住宅を訪問したり，県外避難をされている方々のもとを訪れたりして聞き取り調査を実施してきたが，近年は多くの避難指示地域で空間放射線量が低減して各地で指示の解除が進み，被災自治体を直接訪問することが可能となってきている。

避難指示が解除された地域の中には，事故前の 80%近い人口が帰還した地域がある一方，商業施設や医療機関など生活インフラ復旧の遅れ等の影響で住民の帰還が捗らない地域も存在する。こうした地域では住民帰還の呼び水として積極的な交流人口の拡大を模索しているところが多く，教員が学生とともに被災地を訪れ，方言調査を実施すること自体が直接被災地域の復興の一助となりうる。

昨年度調査に訪れた地域でもインフォーマントから「久しぶりに若い人と話をして楽しかった」「町中を若い人が歩いているだけで元気が出る」などの声を耳にし，談話収集調査が早くに帰還された高年層の方々の「傾聴支援」につながっていることを実感している。今年度も従来同様，避難指示解除地域にお伺いし，方言談話資料を収集することを通して被災地の支援に取り組む(目的(1))。

また，この間福島県内の私立大学(いわき明星大学，奥羽大学)に相次いで方言研究者が着任し，福島大学と共同で本事業に取り組む体制が整った。福島大学の立地する福島市から，被災地の存する浜通りや阿武隈高地までは，同県内といえども場所によっては移動に 2 時間以上かかることも多く，調査の妨げとなっていた。被災地に立地するいわき明星大学，県内各地とアクセスが容易な郡山市に位置する奥羽大学と連携することで，県内被災地方言の記録・保存活動の効率が格段に向上する。「福島県方言研究センター」の運営を通して，3 大学(および県外)の福島方言研究者が長期的に県内被災地方言の保存・継承活動に携わるための基盤整備を行う(目的(2))。

○研究メンバー

〈研究代表者（研究所長）〉

半沢康(人間発達文化学類・教授)

〈研究分担者（プロジェクト研究員）〉

中川祐治(人間発達文化学類・准教授)

白岩広行(立正大学・文学部・講師)

※所属等は 2017 年度のもの

○研究活動内容

本年度は文化庁委託事業「被災地における方言の活性化支援事業」を受託し，さらに科研費を活用して活動を行った。

(1)被災地方言の談話資料収集

引き続き県内被災地方言の自然談話資料収集を実施した。被災地方言継承の観点から，各地の方言の全体像(音韻，文法，語彙，アクセント，イントネーション)を精緻に把握することが不可欠である。これまでのデータに加え，さらなる談話資料の蓄積を図った。

今年度は特に，避難指示が解除されて住民の帰還が始まった地域に赴き，先駆けて地域に戻られた高年層の方々にお話を伺った。震災時の話のみならず，小さいころの思い出や地域の行事，文化などさまざまなお話を聞かせていただいた。お話を伺うに際し，被災された方々の傾聴支援にもつながるよう心を砕いた。さらに調査結果の一部を CD 化して公開した。

(2)被災地における方言教育の実践

2017 年度は住民の帰還とともに小中学校の

再開が進んだ。地域で再開された中学校へ伺い，地域の方を巻き込んだ方言教育実践を行った。

被災地では地域アイデンティティを維持するための縁として，地域文化に関する活動や教育の必要性が高まっている。このような被災地の教育活動において，調査で得られた地域の方言資料を有効活用するための方策を検討することは被災地の復興支援の一助ともなり，同時に被災地における方言継承のきっかけともなりうる。本年度は小高中学校の協力を得て，科学研究費の研究協力者（小学校教員）らとともに方言教育の授業を実施した。

(3) 方言研究者ネットワークの構築

福島大学の「プロジェクト研究所」制度を活用して福島大学内に「福島県方言研究センター」を組織した。分担者ほか学内外の言語研究者に研究所の研究員（プロジェクト研究員）を委嘱し，被災地方言の調査研究を継続的に実施していくための体制整備を引き続き行なった。

2018 年 3 月 6 日（火）には，福島大学において本事業の成果報告を行っている。

〇研究成果

〈学術論文〉

半沢康 2017「グロットグラム調査データの実時間比較」『空間と時間の中の方言』, pp. 283-303

Fumio Inoue & Yasushi Hanzawa,Observation of Linguistic Change in Progress Through Real Time Comparison of Glottogram Data,VIII. Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics, 2017, pp. 31-43

白岩広行 2017「方言記述のためにできること―震災後の福島から―」『ことばとくらし』29, pp. 102-104

半沢康 2018「要地方言の活用体系記述　福島県福島市方言」『全国方言文法辞典資料集 (4) 活用体系 (3)』, pp. 29-39

白岩広行 2018「7 時間の談話資料からわかること―福島県伊達市方言の受身関連表現―」『立正大学文学部論叢』141, pp. 137-152

白岩広行 2018「福島方言の表記法を考える」『立正大学國語國文』56, pp. 1-13

白岩広行 2018「方言だから伝わることを考えて」『新しい地域文化研究の可能性を求めて』3, pp. 54-64

〈口頭発表〉

小林初夫・半沢康「東日本大震災被災地における方言教育の取り組み」日本方言研究会第 104 回研究発表大会（関西大学）, 2017. 5. 12

半沢康・本多真史「方言調査を介した被災地支援－避難指示解除地域における取り組み－」第 1 回実践方言研究会（金沢大学）, 2017, 11. 11

白岩広行「日常のことばを分析する－方言研究の立場から－」平成 29 年度立正大学國語國文学会前期大会（立正大学）, 2017. 6. 12

白岩広行「福島から考える方言記述の意義と方法」平成 29 年度立正大学人文科学研究所新任教員発表会（立正大学）, 2017, 7. 26

白岩広行「福島方言の記述の概況と指示詞・代名詞調査報告」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」第 2 回研究発表会（国語研究所）, 2018. 3. 11